



































































































































曾津高崎灯台案内

この灯台は、西古見灯台の愛称で親しまれ、正式な名称は曾津高崎(そつこうさき)灯台と呼ぶ。日清戦争後、台湾航路の航路標識整備が必要となり、明治二十八年十二月六日、当時の陸軍省により着工、翌二十九年(一八九六)十一月八日竣工、同二十五日に奄美群島では最初の灯台として、戦中、戦後の一時期を除いて沖行く定期船や貨物船、地元漁船などの航行安全を、百余年の間見守ってきた。

奄美大島西端の岬からは、加計呂麻島・請島・与路島・枝手久島や変化に富んだ大島海峡の美しい海岸線も楽しめ、晴れた日には徳之島まで眺望できる。

近海は、奄美鯉漁業の創始海で、曾津高崎灯台建設に従事した佐多村の人たちが、工事中沿岸漁業に有望であることを看取り、西古見を拠点に出漁し、これに刺激されて西古見の朝虎松翁が有志を募り鯉漁を始めたのが、奄美群島鯉漁業の発祥地である。灯台の背後には、大戦中陸海軍の砲台・監視所・弾薬庫防備所などが設置され大島海峡西口の軍備上の要塞で戦災にも遭い幾度も改築された。現在は無人で海上保安部が管理しているが以前は灯台職員が住み子供たちは西古見小学校に通学していたという。

岬に立つ白い灯台を見ると

「灯台守夫婦を主題にした映画『喜びも悲しみも幾歳月』」

俺ら岬の 灯台守は

妻と二人で 沖行く船の

無事を祈りて 灯をかざす

灯をかざす

の歌が、東支那海から聞こえてくるような 情景である。

瀬戸内町

















































観測所跡

この観測所(壕)は、旧日本陸軍により昭和15年に建設され、正式には「掩護(式)観測所」と呼ばれた。

射撃目標の方向と距離を測定し、山陰に設置された砲台に連絡する役割を担い、壕内部の中央台座には監視用の望遠鏡が設置されていた。

平成16年5月に整備されるまでは、草木に覆われ外部からは全く見えないように造られていた。また、中のコンクリート壁には海上の岩や島々の図が描かれ、距離などが細かく記されている。



















































